

## カザミアンの理論

英国の文学と文化を対象とした研究の中でカザミアンがなそうとしたことは、文学という魂の領域の一現象に、正確な科学の方法を可能なる限りに応用すること、特に一見恣意的でそこに何等の法則性も窺われな文学発展の歴史の曲線の不規則性の中に、何等かの因果の法則を発見して、それによってそれを説明することであった。このため彼は個人の精神と同じく民族の精神というものを仮定し、これを民族的文学の原動力とする。そして人間の精神能力として数え上げられる理性、感情、想像、意志の中、意志は文学的活動とは無関係のものとしてこれを除外するならば、残りの中で感情と想像とは互に親近性をもっているため、人間の文学的活動を、理性を主としたものと、感情・想像を主としたものと二つのグループに大別することが出来るとする。

さて一つの傾向の文学が成立した場合、その文学は自らを維持するためには常に新しい喜びを与えなければならず、そのため常に新しい素材が探宥され、又常に新しい、そしてより強烈な表現方法が考案される。そして或る期間が経過すると、もはや素材は涸渇し、作家はその涸渇を

白田昭

補うために媒体の強烈化を求め、度を越えた、不健全な程度にまで奇矯突飛なものに走る。そしてこの経過に対応して読者の心の中には、一つの能力の強烈な行使が余りにも極端にまで求められたため、その能力の疲労が生じる。かくして度を越えた強烈さに対しては、民族の奥底にひそむ本能的な生の意志が危険を感じ、健全、均衡の欲求が働き出し、使ひ古され、聞き飽きたものを捨てて、まだ手つかずの処女的文学手段による快樂の追求、即ち新鮮さの欲求が働く。一つの傾向の文学がこの様な限界に達したときには、民族の心理は均衡本能の作用によって、その反対の傾向の文学を欲求する。この様にして理知主義から情緒の追求へ、或いはその逆に情緒から理性へと、対立する二つの極の間を振動する民族の心理的リズムの動きに応じて、文学の発展の流れは規則正しい進行を迎るのである。

このように文学史は感情と想像の局面から理性の局面へ、更に又その逆へと、その継続の期間やその間に介在する過渡期の長短の差こそあれ、いくつかの局面の継起を重ねて発展して行く。この間にカザミアンは更

に一つ概念、即ち彼が個人の精神に対応するものとして民族の精神を設定した如く、個人の記憶の能力に対する集団の記憶という概念を設定する。この記憶によって、人間の一集団の次々の芸術的経験は深さにおいて蓄積され、新しい局面の唯中にあつても、以前の局面の潜在意識的記憶が維持される。例えていえば、文学的發展を重ねて来た文明国の子供は生まれながらに年老いている。彼が丁年に達する頃には、彼の中には彼の属する民族という心理的有機体が経験して来た諸局面の漠然、混然とした記憶が存している。彼にとっては如何なる文学的新運動の中にも既知の感が感じとれる。この様な潜在意識的記憶が量を多くして行くにつれ、一つの文学的的局面は、その新しさ、その芸術的処女性の何物かを失う。芸術的更新の手段となる新鮮な精神的資源の量が減ずるにつれて、上に述べた素材の涸渇、媒体の強烈化、感性の疲労という経過は更にすみやかとなり、リズムの運動を加速する。そして一方の極から他の極へ、そしてその逆へと動く心理のリズムは、その振動を重ねるにつれて急速になって行く。これが集団的記憶の及ぼす作用の一つであるが、更に又その作用の結果、一つの局面には以前の多くの時代の記憶が含まれているのであるから、決して一つの局面は以前の局面と如何程類似したものであるとしても、決してそれと同一ではあり得ないのである。例を理性的局面にとつてみるならば、或る時期に文学が理性の局面にあり、そしてそこから心理的リズムの振動の作用で一度感情の極を経過して理性的局面に立帰ったとき、始めと終りの二局面はいずれも理性の局面ではあるが、後者の局面には集団的記憶の作用によって感情の局面の経験的記憶が含まれている点が異なるのである。

この様にして集団的記憶の作用によって、心理的リズムの振動は、常に同一の所を往復する平面的なものではなく、二度と同一の点を経過しない立体的な運動をなす。そしてその運動には加速的因子が内在し、その周期は段々と短くなって行く。それ故かくの如き心理的リズムの振動の作用をもつともよく表現する象徴は、傾斜して交叉する切線をもつた上昇螺旋線である。交叉する二つの切線が理性と感情の極であり、文学的發展はその螺旋線の線に沿って動いて行く。そしてその線が上昇するにつれて螺旋線の半径は減少し、一つの極から他の極を経てもとの極へ戻つて来る運動の周期が減少して、遂にはそれは螺旋線の頂点に到達して心理的リズムの振動は停滯する。そしてこの極限附近の状態では文学的、心理的な二つの傾向、即ち理性的傾向と感情的傾向とは互いに混交し合い、ここでの文学的性格はもはや折衷主義以外にはなくなつて来る。

今迄述べて来たような心理的リズムの振動、これが内奥から発する精神の自律作用による文学的發展の経とするならば、もう一つ文学史を形成するのに参与する緯は人間集団の社会的發展である。一つの時代の政治的、経済的な出来事や影響は、心理的リズムの上に直接の關係をもち、そしてそのリズムと合致するか、それと交錯するかによって、リズムの進行に、より大きな刺激を与えたり、一時それを抑制したりする。そして社会的發展は知的、芸術的發展の場を提供し、各時代の歴史的枠組を構成するものである。つまりこの社会的要素はあくまで第二義的な役割を果すもので、決して決定的作用を及ぼすものではない。精神的な事柄における外的影響というものは、その外的影響をうけいれる素地が出来上つている場合にしか作用しないのである。それは内的なりズムの深い根

源にあるものではない。文学史の主要方向を決定するものは、その民族の魂の内的な決定であり、その曲線の起伏の詳細については、それを決定するものは歴史的、社会的なすべての環境なのである。

カザミアンの文学史説明の理論を抽象的に要約すれば大体以上の如きものであるが、以下その具体的応用の場合を検討して見たいと思う。彼の学位論文「イギリスの社会小説」(Le Roman social en Angleterre, 1830-1850) は彼の以後の全発展の萌芽の中に蔵した著書であり、ここにおいてカザミアンは一八三〇—一五〇年の英文学史の一局面に、理性の極から感情のそれへの劃然とした心理的リズムの一つの振動を把握し、そしてその振動と外的、特に社会的影響との関係を明らかにすることに成功したのである。

産業革命による余りにも急激な社会的発展の結果、その進展の急速さに適応し切れなかった英国の社会組織の処々方々には、産業プロレタリアの悲惨などいくつかの歪が生じた。そして時はあたかもフランス革命の余波も鎮まり切らぬ時代のこととて、何とかこの歪んだ社会組織のたがを締め直して悲惨な革命を避け、民族保全を計りたいということが万人の関心事となった。

この問題に直面した英国人の心理の反応は二つの型に大分される。一方の側には明晰な合理的、抽象的、分析的思考が存在する。しかもこの型の精神は当時のブルジョアジー興隆という社会的条件に幸いされ、他の一切の精神的活動を圧倒して唯一人勢を揮っていた。そして英国には分析と利己的思索の乾いた風が吹きわたたり、生き残ったものは経済学者の冷酷な明晰さと実業家の利害の打算しかない様に見えた。この現実を

見た他の型、即ち想像的、情緒的な気質の人間は、一方に傾いた精神的平衡を再建しようとする本能的な反動を起す。そしてこの起った反動にはブルジョアジーの勃興に損害をうけた貴族の怨恨と、虐げられ、欺かれたプロレタリアの不満という社会的次元の影響が幸いする。対立する相手が合理的、実証的であるが故にこの反動は感情的、理想主義的である。前者を代表するものがベンサム、ジェームズ・ミル、ブルワー、マーティノーであるならば、後者はニューマン、カーライル、ディケンズなどによって代表される。

そしてカザミアンはこの書の中で精緻な論理と博引傍証を以て、カーライルの社会的感情主義に生まれて、ディケンズの宗教的愛他主義、ディズレーリーの社会的トリー主義、そしてガスケルのキリスト教的干渉主義を経て、キングズレーのキリスト教社会主義に至るこの反動の色々な局面をディケンズ、ディズレーリー、ガスケル、キングズレーの小説を通じて検討しているが、彼がここで得た観念は次の如きものである。英国精神にはその根本に二つの典型が存して、その一つは即物的、実証的な型で、他の一つは想像的、情緒的な型である。そしてこの二つの典型も要するに知性と感情の対立という基本的なものに還元される。そしてこの基本的、古典的なものではありながらも、その対立する二傾向の中の一つのものを超えた優越に原因する不安定を、もう一つの傾向の反動によって補正する民族心理の運動は、極めて英国的である。現に一八三〇—一五〇年に見られる如く、物質的發展の欲求が盛んなときには即物実証的気質の豊かな資源が見出されるが、一旦魂の深い欲求が、

鎖を解かれたエゴイズムを緩和しようと望むときには、愛他的情緒や同情的想像などの情操的資源の宝庫が、常にその門を開いていることが英国の幸運なのである、とカザミアンは断定する。

このようにしてカザミアンは、「イギリスの社会小説」においては、英国民族の精神的典型としての具体的、実証的な型と情緒的、想像的な型の二つを設定し、そしてその相互の補正運動によって、その精神生活が発展して行くという概念を打ち立てたのである。そして次の著作「近代英国」(L'Angleterre Moderne, Son Evolution)においては、「社会小説」で得た二つの典型の対立の概念を英国近代社会発展の経過に適用し、その内的な理由を説明しようとするのである。

一八三二年から一九一〇年までの一世紀にわたる英国社会の発展を粗描しようとして、カザミアンはその発展をやはり二つの対立する傾向、即ち現実の問題に対応する民族の順応の様式として、英国民の気質の中に深く植えつけられた本能的順応と、近代生活の一般的条件がますます要求する理性的な、思索の加えられた、秩序立った順応との間の葛藤であると解釈する。カザミアンの説明によると、一つの民族が生きながらえるのは、その民族のおかれた自然的、社会的条件への絶えざる順応の努力の結果である。この順応の過程を英国において眺めるとき、そこに二つの型が明らかとなって来る。即ちその一つは本能的順応であるが、これは一種体系のない体系によって行きすぎの矯正、平衡の回復などを計るものであり、この過程にあつては意識、理性は殆ど参与しない。この方法はおおよその、或いは間に合わせの平衡を求める場合には、あやまつことのないものであるが、方法の一貫性などはもう一方の知的、思

索的な性格を特徴として体系、明晰性、秩序を追求し、目的と方法或いは方法相互間の意識的関係づけを行う過程に求められねばならない。前者が具体的、即物的、経験主義的であり、実際のな安全性と有用性に富むのに対して、後者はややもすると事実から一つの原理秩序を抽出すると称して抽象に走り、自らの原理の性急にして浅薄な適用をなしては、事実と知性の不一致による無数の誤りを犯し易いことを短所とする。しかし一度これが成功するや、複雑にして錯綜する現実は見事に単純化され、そこには時の経過にもめげぬ明晰と秩序の美しさが見出されるのである。前者の態度が伝統的に英国の態度であり、後者のものはフランスが特徴とするものである。そして前者は人生そのものの態度であり、後者は科学の採用するところのものである。故に過去の英国の特性は、その民族的努力において科学よりも人生を扱んだことであつたということになる。

先ずカザミアンは自らの考察に設けた時代的の枠、即ち一八三二年から一九一〇年の中に大きな三つの動きを考える。その第一は一八三二年、六七年、八四年の三次にわたる選挙制度改正の運動に具現される理性的適合の動きである。フランス革命の伝染を恐れた本能的反動に基く保守主義の時代には一時退いていた如く見えた政治的社会的合理主義の波も、ウォータールーの戦い以後再び力を得、古い憲法、昔ながらの生活などの防波堤を乗り越えて、法律風俗の民主主義的改正、社会的悪弊の体系的矯正、貿易と企業の自由などをもたらす。これは一言にいえば自由主義であり、個人主義である。この二つの思想は理性の名において、近代英国をその因襲的、自己矛盾的な制度風習から解放したのである。その

第二は第一のものと殆ど時を同じくして起つた本能の復讐である。ジョン・ステュアート・ミルを典型とする第一の型に対して、思想家や詩人は新しい国民を指導するのに、理性の光よりも感情のそれを選んだのである。つまり第一の運動の結果、英国は科学と産業に適合は出来たものの、魂の要求との調和を失つたのである。カーライル、ニューマンなどのこの運動の使徒を先頭として、消極的、分解的な理論である個人主義のために崩壊した社会の有機的関係の再建が始まった。博愛主義が勃興して法律風習には新しい連帯性の觀念が浸透し、宗教的、美的神秘主義は人間の感情の高揚を養う。これが第一の運動に対する補償的な第二の本能の適合の運動であり、これをカザミアンは「本能の復讐」と呼ぶ。

この様に十八世紀末から十九世紀始めにかけて、功利主義哲学と個人主義的経済学を先頭とする理性的順応の極めて急激猛烈な遂行の場面に、後者の順応様式がどのような反応を示すかを検討したカザミアンは、そこに英国の独自性を発見する。即ち、政治の分野で二大政党の対立という様式をもち、動に対しては直ちに反動が起る規則正しさは、英国精神の特色としてよく知られて来たことである。これと同じように、英国的精神は本能的叡智の混沌とした感覚に伝統的に規制されて、理性の一方の進展のあり得べき謬りに対する保証として、民族的生命の深い底に、常に理性に対し背反的、補足的な立場に立つ傾向の発展を有していた。理論的能力に対する一辺倒の信頼は極く少数の者の特性であつて、この精神態度が大衆にうけいれられるには、反対の傾向による激しい反攻と中和をうけなければならぬというのが、英国精神一般の独自性であるというのである。

かくして第一の民主主義と個人主義という名の理性的適合、そして第二の感情主義という名の本能的適合、この二つの運動によって均衡を保つた英国には一八六〇年から八〇年までの繁栄と安定の黄金時代が訪れる。しかしそれも東の間、ドイツ、アメリカなどのより若い国家の能率的な、整頓された産業との競争を余儀なくされて、英国の一時の間に合わせの平衡を旨として来た旧式の組織は重大な脅威にさらされる。過去の経済的優位は今や挑戦をうけ、産業の発展の速度もはつきり鈍っている。帝国内の属領と本国との関係も紛糾をかもし出す。ヴィクトリア女王の姿が消えた頃には、英国は衰頹への角を曲り切つたかのように思える。第三の運動、即ち英国が対ドイツ、アメリカとの経済的防衛戦に成功し、近代生活の現実に順応して、その民族的生命を全うするための理性的適合の運動が始まるのはここである。英国はその伝統的生活様式、即ちその独自性を構成していた本能的順応の方式を或程度抑制して、より多く知性に頼る必要がある。英国の将来にひそむ危険は、この本能より知性への進化に成功すること、即ちその伝統的な経験主義の長所を失うことなく計画的革新の領域にまで身を進めること、が非常に困難なことにある。と、このように説き来たカザミアンは英国の将来に一抹の不安を感じながらも、英民族のもつ生の意志を信じ、必ずや英国はこの難関を乗切るのであらうと予言して「近代英国」の筆をおいている。

更に続く著作、「グレート・ブリテンと大戦」(La Grande Bretagne et la Guerre)は前の「近代英国」の攔筆直後に起つた第一次大戦という重大な局面をむかえて、「近代英国」の中で粗描した英国の発展の道が果して現実には如何なものであつたかということが論じられている。カ

ザミアンの述べる所では十九世紀以来英国に課せられた理性的順応の課題は、戦争という民族の総力の結集を必要とする事態に立至って、ますます焦眉の問題となって来た。そして戦時におけるこの理性的順応を表わすものは組織化という言葉である。戦争に勝ち、民族を保全するという大目的の名の下に、一切の力を戦闘能力の向上に結集しようという組織化の運動が英国社会のあらゆる面にわたって起り、その古い非能率的な組織は抜本的な改新をうける。例えば政治の面においては、ロイド・ジョージの戦時内閣は、保守、自由の二大政党の対立交替という今迄の概念を捨て、新しい連立内閣の方式を打ち出した。二政党のそれまでの対立の焦点であった英帝国内属領の自治権問題も、戦争という重大事態を前にして消滅し、その上新しい労働党の興隆と相俟って、古い形の政党対立の情勢図は今や書き改められるべき情勢にある。そして軍事の面においては、英国伝統の個人主義に対してもっとも忌むしいものであった徴兵制度もはつきりと樹立される様になり、経済の面では、古来の自由主義的競争の哲学が修正されて、企業相互の間の競争よりも、その相互の連携に生産能率の向上が求められ、社会的な面では、資本家階級の利得には多額の戦時利得税がかげられ、土地所有者、特に地主貴族の伝統的な大庭園、大獵園も徴用されて、国民を養うために開墾される。そして労働者階級にとっては長年の運動によってやっと獲得されたものである労働条件の保証も一時的停止の止むなきに至る。保守自由の二大政党の対立、徴兵に対する反感、自由主義的競争、資本家階級の利益追求の専念、土地貴族の大庭園、頑強なる労働組合の既得権、これらのものはすべてこれ迄英国人という民族の肖像の著しい特徴をなして来たものである。

これらの特徴を否定し、或いは修正することは、とりも直さず、それは英国伝統の個人主義、自由放任主義から国家の監督規制の下における国家社会主義への進歩なのである。そしてこの進化は戦争によって著しく促進された。

以上の如きものが「グレート・ブリテンと大戦」の論旨であると思われるが、要するにカザミアンは「近代英国」とこの「グレート・ブリテンと大戦」の二書においては、「社会小説」で見つけ出した具体的、実証的典型的な精神と情緒的、想像的典型的な精神との相互補正の運動が英国人の精神的態度であるというテーマを、更に広い社会の発展の面に応用して、そこに本能的順応と理性的順応の対立と相互補正という概念を前のテーマに対応させる。そしてこの二つの順応の方式の中、民族的なものを表わす前者の働きは、近代生活が進むにつれて、国際的性格のものである後者の理性的順応の働きに、場所を譲らねばならない、従って英国社会は民族的なものから国際的なものへと進化し、いつかはヨーロッパ連邦の一地域となるであろうという結論が引き出されるのである。

次の「英国における心理の発展と文学」(L'Evolution Psychologique et la littérature en Angleterre)においては、カザミアンは近代英国の社会的発展という問題をはなれて、英文学史の問題にとりくむ。そしてここではやがて四年後に現われるべき、ルグイとの共著になる高名の英文学史の準備をなすかのように、王政復古期以後の英文学展開の曲線の解釈を行っているが、この小論の冒頭に述べたカザミアンの理論は、大体この著書においてそのもっともはつきりとした、具体的な形をとるに至ったのである。この著作におけるカザミアンの考え方は、抽象的には、

前に述べた所で大体尽されていと思う。そして現在述べなければならぬのは、具体的な英文学史の曲線の説明である。

カザミアンはこの著作まで、英国人の氣質を感情的典型と理性的典型とに二分したが、ここでは文学の型として感情的なもの即ち浪漫主義と、理性的なもの即ち古典主義の二つを考へる。そして文学はこの二つの極の間に振動すると思へるのである。ところで一つの民族が独立した民族としての自己意識、充実した民族意識をもつに至る時期には、その民族の精神的独自性は、この二つの極を表わす文学の二局面のどちらかを積極的に選択する。そしてその選択された局面はその民族の本質的表現となる。英民族が完全なる民族意識をもつに至った時期はルネサンスの花彩もあざやかに、感情と想像の花の咲いたエリザベス朝であった。この時代ほどに英国の多様な諸勢力がその全的表現を与えられた時期もなく、そしてこの抑えるものもなく、すべての能力がのびのびと伸張した局面に「浪漫的」の言葉を冠せない訳には行かないのである。

しかしこの華やかな時代も長く続くものではなかつた。シェークスピア以来段々と強烈の度を加へる想像力の行使に加えて、清教徒共和国に費消された途方もない宗教的熱情は、感性のひそかな疲弊を生み出さないうちではおかなかつた。文学の面では、余りにも強烈華麗な芸術創作の行きすぎ、精神的な面では、ピューリタンの理想郷の行きすぎ、この二つが結びついて、英国の精神を内的生活の反対の極へと運ぶべき心理的振動を誘発する。清教徒共和国の失墜によつて支配的な地位に立つたものは、フランスに亡命し、ルイ十四世の宮廷の古典主義にひたつていた貴族たちであつた。かくして王政復古期の文学は、前の時代のものが感情的、

想像的なものであつたのに対して、主知的、合理主義的なものとなる。

そしてこの文学の調子は、おおよそ一七七〇年頃まで、約一世紀間も支配する。その間に一六八八年の名譽革命という、近代英国の性格を決定するような、社会的に大きな事件が起つた。この革命を成就したものは、ステュアート王朝の絶対王政的傾向とそれを支持する傳統的貴族とに反対する新興の産業ブルジョアジーであつて、この後者は清教徒共和国を支持したブルジョアジーと同質のものである。だから一六八八年の革命は、社会的構成の面から見れば、共和国の時代、更には激しい情緒的精神を深く内蔵する階級の勃興という点でエリザベス朝への転帰を意味するものではないか。それなのに何故一六八八年を契機として、文学の面でも感情の極に立歸る反動が起らなかつたのか、という疑問をカザミアンは設定する。そしてその問題に対する答は次の如きものである。即ちこの場合、歴史的環境は精神の運動と一致していなかつたのである。歴史的環境が心理的リズムの振動に幸いするようになって、心理的リズムの方がまだ振動を起す準備が出来ていなかつたのである。心理的疲弊がまだその効果を生み出して居らず、又王政復古期は決して合理主義的文学の可能性を全部使い果したのでもなかつたのである。先にも述べたように文学という精神の事柄の發展は、この場合の様に、民族の精神の自律的決定によつて行われるものであつて、外的な影響がこれを支配するという決定論はカザミアンの採る所ではないのである。

かくして十八世紀の中頃まで、理性的文学たる古典主義が流行することになるが、英国精神にとつていわば心にじかに感じられるものでないこの傾向が、このように長続きし得たのは、実はこの文学の底流として

合理主義的文学と並行して、王政復古期以来決して感情の文学の流れが絶えることなく、理性の危険な一方的支配に対する保証を提供していたからなのである。古典主義の大御所たるポープにも浪漫的語調はみつけれられるし、ウインチルシー夫人の作品なども常に人の注意を惹いていたのである。この底流としての浪漫的な感情の文学が存在しなかつたならば、恐らく英国民の気質はもつと早く反動を起していたであろう。だから十八世紀の英文学史の課題は、何故にこの感情の文学の表面に現われるのがかくも遅かつたかということである。この解答としてカザミアンはこう考える。一六八八年の革命直後には宗教的感情を特色とするブルジョアジーが貴族に打勝つて勢力の地位についたのであるから、精神的嗜好の振動には有利な条件がもし出されていたが、精神の世界ではこの振動の準備が出来ていなかった。つまり外的条件は整つたが内的条件がそれに沿わなかつたのである。しかるに一七五〇年から一七六〇年にかけてはシバーに始まる感情主義の文学はアディソン、ステイールを経て、もはや否定すべからざる一潮流となり、浪漫主義の心理的準備は相当程度に進んでいたにも拘らず、今度は外的情勢が文学的革新に向つてはいなかつたのである。社会の中のすべてのことは安定した嗜好に有利であり、支配的な貴族と上層ブルジョアジーの權威を脅かすものは何もない。文学の面から見ても、感情主義の文学は、自由な、抑制されない想像の文学と結びつかなければ、革新的な浪漫主義文学としての本分を充分に發揮し得ないのである。感情だけの表現であるならば、既存の文学形式で充分であり、従つて文学的革新は起り得なかつたのみならず、感情の文学は乾燥涸渇の傾向にあつた古典主義文学の中に潤いを導入す

ることによつて、かえつてその余命を長くしたのであつた。

このようにして古典主義文学が余命をまだ保っている一七五〇年から一七六〇年にかけて浪漫主義の胎動期が始まるのである。この変化の精神的な面での経過は、要するに知的傾向に対する情緒的、想像的傾向の反動であつて、その反動は、魂の衛生に結びついた、潤いを求める感情的欲求がまず最初に起り、そしてそれに随伴して想像の覚醒が起るといふものである。そしてこの内的なりズムの振動を助ける外的な事情としては、一つには新興産業ブルジョアジーの異常な勃興があげられる。利益の追求を本旨とし、機械的、唯物的な哲学を奉じたこの階級は浪漫主義運動を異様に刺戟する。先ず第一に彼等の知的、分析的傾向は情緒的、直観的傾向と相反し、彼等の傾向の急激な伸張は、その反動として、その反対の傾向の興隆を刺戟する。第二にこの階級は、一六六〇年以来何等の新陳代謝も行われず老化、硬化の道を辿つていた英国の階層制社会の中に革新の原理をもちこみ、既成の制度、既存の權威に疑問を投げかける雰囲気を助成した。そして更に第三には、この階級の所産とされた産業革命によつてひきおこされた産業プロレタリアの悲惨は、直接に浪漫主義を養ふことはなくとも、その傍らにあつて、その事実におけるジャスティフィケーション、イラストレーションとなつたのである。最後に、この階級は、その唯物的、分析的思考にも拘らず、その胸の奥深くに宗教心を蔵していた。そして一七六〇年代のウェズレーの説教に始まるメソヂイズムの波は、これらの階級すべての中にひそんでいる英国独特、そして又一六六〇年以来賤められ、抑えつけられて来た宗教的、神秘的な情緒に電撃を与え、この情緒と共に他のあらゆる感情的要求の決定的



覚醒を促したのである。かくして暗黙の中に心理的、社会的準備の出来た浪漫主義の蛹の殻をやぶって、美しい蝶を生み出す最後の衝撃は、フランス革命によって与えられるのである。

ワーズワスとコールリッジの「抒情民謡集」によって英国浪漫主義の花が開く。そしてこの局面は、「浪漫主義復興」と呼びならわされている様に、エリザベス朝の局面への復帰であって、民族の心理的リズムは、エリザベス朝の感情的局面から十八世紀の理知的局面を経て、ここで完全に一往復の振動をなしたのである。ところでこの純粹に浪漫主義的な局面は一八〇〇年代から一八三〇年代まで僅かに三〇年しか続かない。あの様に長い準備期間の後に、その本当の開花がかくも短いものであったことは、人の目を打つことである。カザミアンの説明する所では、その理由はこうである。文学の浪漫主義に先立って、魂の浪漫主義はすでに長く存在していた。感情主義が人々の魂の中に目醒めたのは、ずっと以前のことである。その上理性によっていた古典主義の中には、理性の内在的性格として抑制の要素が含まれていた。それとは逆に浪漫主義の標榜するところの、想像的熱烈と結びついた情緒の純粹の追求というものは、自らを制限し、抑制する規律というものを含まない。それは抗し難い衝動にかられて最も激しい効果を求めるようになる。文学上にはつきり現われるより以前に、長い間魂は浪漫主義を生活していた。そこへもって浪漫派詩人、特にバイロン、キーツ、シェリーの第二代詩人達の強烈な情緒追求は、平衡のひそかな本能の発動する限界に速かに到達し、民族精神の中に感情、想像の能力の疲弊と新しい理知の文学を求める要求を作り出したのである。

やつと感情の極に帰りついた民族的心理のリズムは再び反対の極に向つて旅立って行く。そして、十九世紀の半ば以後リアリズムと自然主義において理知の極に到達するが、その間の一八三〇—一八五〇年は過渡期であり、この時期は平衡の追求をその特徴とする。なおかなり強く存在する浪漫主義の流れが、カーライルの非難した孤立的、主観的なものから、ディケンズその他の社会小説の示す如く社会的、客観的なものになつて行くのがこの過渡期の性格を象徴するものである。そしてリアリズムと自然主義という理知の極から再び心理的リズムは世紀末から二十世紀の始めにかけてシンボリズムの名の下に浪漫主義の極に振動する。

このように見て来るとき、最初のエリザベス朝以来、英民族の心理的リズムは二回振動したことになる。そしてその周期を見ると最初の古典主義時代はその期間の長さで目立っている。そして十九世紀に入って現在までの一世紀とわずかの間に心理的リズムの振動の回数が頻繁であることも著しい。この事実が証明するものは集団的記憶の作用である。ポープの時代は英文学史上今迄にない新しい事を行うという意識にみちていた。しかるに十九世紀始めの浪漫主義復興は、何にもましてエリザベス朝への復帰であり、ワーズワスの行った運動は決して新しいものではなく、底流として存在した諸要素の綜合であり、その純粹に新しい文学的資源は僅かであった。以後この傾向は新古典主義、新浪漫主義と心理的リズムの振動するたびに激しくなつて行く。一つの傾向に倦怠を感じた民族的心理は新奇さを求めて反対の傾向に赴くが、そこに見出される一応新鮮な題材の底には、漠然とした《*déjà vu*》の意識がひそんでいる。それで新鮮感が減じ、心理的リズムの振動が再び起るといふ結果になる。

かくしてリズムの振動周期は早まって来る。この様な局面に立至ると一つの時代はもはや決して前の時代を忘れない。新たに生まれる時代の特色の下には、死に行く時代のそれが窺われる。一つのが死滅して新たなものが生まれるのではなく、何物も完全に姿を消さずに互いに修正し合う。それで現在の英文学は民族の心理的リズムの経過した四つの局面、浪漫主義、古典主義、写実主義、象徴主義の並在の局面である。心理的リズムの発展は停滞し、色んな流派は混然、雑然と存在する。このような浪漫的傾向と古典的傾向の折衷という局面、これが民族文化の行きつく終点であつて、ここから逃れ出て新たな生命を得るためには、社会的組織の完全な一新などによる民族の魂の改新もその機会となり得るであろう。しかし英国にとって幸いなことには、英国は新たな天地に新しい英国を形成している子孫を持っている。このアメリカ、カナダ、オーストラリアなどに、英文学は新しい生命を発見するであろうし、又そこからの新しい生命と樹液の流入も可能となるであろう。

以上の様な論旨と結論をもつたこの「心理的発展」においてカザミアンの理論は体系的表現を与えられているが、それはまだやや抽象的であり、その完全な肉付けは「英文学史」(Histoire de la Littérature Anglaise; Epouques Moderne et Contemporaine)を俟たなければならぬ。しかしこの大著において展開される論理の根拠は以上述べたのと同じものである。

ところでカザミアンはこの理性と感情・想像の二つの極の対立というもの、つまるところ古典主義と浪漫主義の対立であるとす。この場合カザミアンの用いている意味ではこれらの言葉は決して十八世紀の大

部分、及びその後半から十九世紀初頭にかけてのそれぞれ二つの時期に通常冠されている、英文学史の一面面を意味するものでもなく、それをも含んだ、より広義の、理性をその支配的主調とする精神的態度と、感情、想像をその支配的主調とする精神態度を意味するもので、一方は他方よりも優り或いは劣るといふような価値の判断はそこには何等含まれていない。この二つの対立というものは、それ故決して英国特有のものでもなく、それこそ古典的な、いずれの国にも見られる世界的、少くとも欧州のものである。そして近代欧州民族の心理的リズムの歴史は、同じ対立葛藤を原動力として、殆ど同じ曲線を画いている。しかしこの欧州の、国際的リズムの運動の中にも、やはり英国には英国的な何物か、フランスにはフランス的な何物かが感じとられるのであつて、この点、即ち殆ど類似的な曲線を画きながらもその曲線を形成するに際しての民族精神の自律的決定の及ぼす民族的、独自の要素を含む文学史の比較対照にこそ、新しい文学研究、比較文学の道が開かれるとカザミアンは考へるのである。

さてそれではこの古典主義と浪漫主義の二極の間の心理的リズムの振動という欧州的な文学の発展様式の中で、英国がその民族性を示すものとして誇り得るのは何であろうか。カザミアンは勿論英文学の特性は、フランス文学のそれが古典主義にあるのに対して、浪漫主義にありとしている。といつても決して理性の文学、古典主義が英国において変則であつたのではない。文学だけに止まらず、哲学や科学などにおいても、英国人の理性に基く活動は決して変則といえるものではなく、やはり民族性にしっかりと根ざしたものである。それでは英国精神というものは

分裂的、多元的なものであろうか。

カザミアンはこの問題を「英国精神について知るべきこと」(Ce qu'il faut connaître de l' Ame Anglaise)の中論論じているが、彼がここで得た結論は次の如きものである。英国人の精神活動にはその商業的、工業的成功に見られる様な極めて即物的、実証的で利害の打算を決して忘れないものや、その個人主義に見られる自己主張の強さなどの如き、極めて本能的な低次の活動から、利害を去った夢の追求、理想主義、高揚された抒情的躍動などに至るまで、一見極めて異質な活動が多種多様に存在しているが、決して英国人の気質は多元的なものではない。これらの多様そして異質な活動がそれぞれ和合出来るといふのは英国人特有の精神的分業によるものである。英国人の魂の働きは一つの孤立した線の上で行われるのではなく、補足的な働きの網の目の中で行われる。或る機能が行使されるときには、それは必ず他の異つた或いは反対の機能が確實にもたらず必然的な矯正を期待している。だから物質世界の征服に没頭する人々は、理想主義者が働いておたがいの相反した行き過ぎの間に平衡が打ち立てられるのをひそかに感じている。又理想主義

者は、自らの憧憬の危険な大胆さに対して功利的な性質の存在が構成する保証を直感的に感じているというのである。

要するに古典主義も浪漫主義もいずれも相互矯正し合う英民族の精神活動の現われなのであるが、そのもつとも密接な関係にある隣国、明晰と秩序に最も内奥からの親近性を感じるフランスとの関係において見たときには、英国の特徴はやはり情緒と想像にあるものなのである。オーダス・ハクスレーはこのことを極とオリーフの象徴の下に理解したが、カザミアンも決してこれを看過してはいなかった。彼は“Parallelism in the Recent Development of English and French Literature”なる論文の中で次のようにいっているが、これは英国の特性をはっきり示していると同時に、今迄述べて来たカザミアンの理論の概要の結論とするに充分なるものであろう。即ち、

古典主義の精神は常にフランスを通じて英国に達し、そして浪漫主義はフランスにとってヨーロッパ的である前に英国的なものであった。

と。